戦火のシリアから逃げてきた子どもとお母さんのために

1 ヨルダンでの活動 2012年10月～2013年3月

物資配布
KAPキャンプ（シリア国境に近い難民キャンプ）と首都アンマンに住む約1700家庭（約1万人）が防寒上着と靴、ストーブや毛布、生理用品や紙おむつなどの物資を受け取った。

子ども支援
KAPキャンプやラムサ市（国境から5キロ）、アンマンで子どものワークショップを実施。子どもたち3000人に居場所の提供、遊びやスポーツ、遠足などを通じた心理サポートを実施。

女性支援
500人以上の母親を対象にKAPキャンプでワークショップを開催。ストレスの軽減や家族関係の改善が見られた。

医療支援
アンマン市内にあるアキーラ病院のシリア人向け産科病棟に対して医薬品および医療器具を提供。100人の妊婦が帝王切開手術を無償で受けることが出来た。

2 レバノンでの活動 2013年4月～

シリア避難民の状況
- 150万人を超えるシリア避難民のうち50万人以上が今年になってレバノンに流入し、昨年の10倍近くになっている。
- 女性と子どもが多い。
- レバノンには避難民キャンプが作られておらず、また物価水準が高いため、安い住居を求めて「パレスチナ難民キャンプ」とその周辺に、パレスチナ人・シリア人あわせて5万人以上が集まっている。
- シリア国内には約50万人のパレスチナ難民が登録されていたが、その1割がすでにレバノンへ「再難民」となって逃れている。
- 同じようにシリアから避難してきた場合でも、パレスチナ人だけにはシリア出国とレバノン入国に税金がかかるなど、シリア人とパレスチナ人では待遇が違う。またパレスチナ人はUNHCR（国連高等難民弁務官事務所）ではなくUNRWA（国連パレスチナ救済事業機関）の管轄下におかれるため、支援内容にも格差が生じている。

脆弱層のシリア避難民支援と受入れコミュニティ強化のために
60年以上前に作られて、環境もインフラも劣悪なレバノン国内のパレスチナ難民キャンプでは、新たなシリア避難民の流入でこれまで以上に生活状況が厳しくなっているため、当会ではパレスチナ難民キャンプとその周辺で支援活動を開始した。女性と子どもだけの世帯、障害者のいる世帯などを優先的に、シリア人・パレスチナ人を区別せずに行う。
- 生活物資や食糧を配布、継続した訪問支援でセイフティネットを提供
- 幼稚園・学童等へ子どもを受け入れ、居場所提供と心理サポートを実施
- 精神科、産婦人科、歯科などの医療支援実施
- 女性向けの継続した心理サポートの実施
- 地元NGO等の受け入れコミュニティを支援
- 現地協力団体：子どもの家、ファミリーガイダンスセンター、UNRWA他

この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けています

「ありがとう」から変わっていった子どもたち

避難民キャンプから移って来たばかりの子どももいる（ラムサ）

不安定な男の子たち

ヨルダンでは、シリア難民キャンプの一つであるKAP難民キャンプで母親と子どもたちのワークショップを行いました。キャンプで特に気になったのは、小学校に通っていない男の子たちでした。キャンプ内では、国連も子どもたちを通学させようと努力しています。でも子どもたちの多くは学校に通うのが楽しくないのです。シリア人だけの学校と、ヨルダン人と一緒に通う学校がありますが、特にヨルダン人と一緒の学校に通っている子どもたちは「同級生にいじめられる」と言って行きたがりません。さらに「先生にいじめられる、殴られた」と言って通うのをやめてしまった子どももいました。キャンプの子どもたちは、缶詰のホンモス（ひよこ豆）などを学校に持って行って売り、お小遣いや家計の足しにしていますが、先生に対しては実際よりかなり安くして渡すことで、少しでも気に入ってもらおうとまでしているのです。

「一番幼い子どもは重い喘息にかかっており、キャンプを出たいと毎日思っています」（KAP）

キャンプの外に住む子どもたちの場合はどうなのでしょうか。国境近くのラムサ市内に住むシリア難民の子どもたちを訪ねてみましたが、ここでも学校に通っていない子どもが多いのです。理由は、「シリアから逃げてきたばかりで、親が登録を済ませていないため、通学できない」「通っていたけど、いじめられるからやめた」「近所の子も皆、通っていないから通わない」といったことです。

学校に行っていない子どもたち。中でも男の子たちが、難民生活で自信を失い希薄になった父親像に直面して揺れ動いている。そのことを実感した私たちは、避難してきているシリア人たちと相談して、8～14歳程度の男の子向けのワークショップを開催することにしました。幸い、ラムサ郡長と円滑な関係を築いてきたため、ワークショップの開催に関してもすんなりと許可を得ることができました。

「好き！」と思うことだと人は集中

することができ、夢中になって持てる才能を発揮できるものです。どんなワークショップが、ラムサの男の子たちにとって最も適切だろうか。そして出てきた答えが「サッカー」を通じた心理サポートワークショップです。「自信」「協調」「他者への関心、思いやり」「礼儀」「夢を描くこと」などは、すべてサッカーを通じて学んでいくことが可能です。子どもたちは、もちろんサッカーが大好き。

「憧れ」の場所でワークショップ開始

会場は「ラムサ・ジムナスティック」に決めました。ここの野外サッカー場は、10JD（約1400円）の使用料を払う必要があり、比較的ゆとりのあるヨルダン人の子どもしか使えません。緑の芝生サッカー場はシリア人の男の子たちの憧れでした。昨年10月にもサッカー試合で利用したため、ジムのスタッフもとても協力的です。

全過程を参加した子どもたち、ボールをもらって

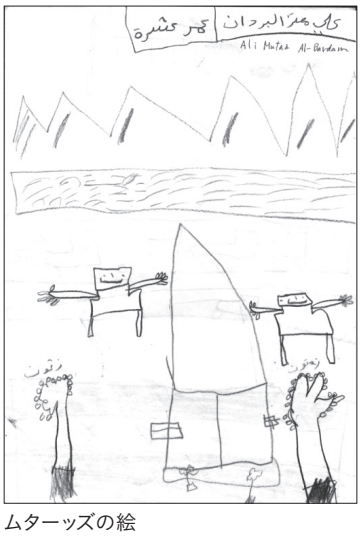
初日、意欲満々の子どもたちがバスに揺られてやってきました。どの子も興奮して目がキラキラしています。準備体操、ランニングを行ってから、思うままにサッカーをしてもらいました。先に自由な時間を与えることで、彼らの抱えているものが見えてきます。他の子どもを押し倒したり無理にぶつかったりする子どもがいて、暴力的なイライラとしたエネルギーやワクワクと興奮したダイナミックなエネルギーを感じました。

子どもたちが十分に満足した後は、徐々に色々なプログラムを導入していきます。たとえば、列に並んでサッカーボールを順番に蹴るゲーム。忍耐力のない子どもは他の子どもを突き飛ばして間に入ろうとし、力の弱い子はいつまでたっても順番が来ずに泣き出してしまいました。しかし回を経るごとに、子どもたちは協力しあうこと、譲り合うこと、ほしいものを得るために待つこと、などを体得していくのです。

ペットボトルで音楽セッション

3回目のセッションでは、ペットボトルに豆を入れて、即席マラカスを作りました。シリア人スタッフの一人は、「こんなものを使って音楽セッションをしても、子どもは退屈するだけだよ」と心配していましたが、実際にマラカスを振ってみると、皆本当に楽しそうです。セッションが終わってもペットボトルを大事そうに抱えていました。シリアから逃げてきた家族の多くは生活を切り詰めて、ギリギリのところで生活しています。ペットボトルだってとっても貴重なのです。

4回目のセッションには66人の男の子が参加。色鉛筆を使って、紙に「川、山、家、木、道、田、人、橋、動物、石」などのアイテムを順番に描いていきます。これは、アートセラピーの一種で、風景構成法といいます。色や線の表現の仕方、アイテムの配置場所から色々なものが見えてきます。たとえば、10歳のムターッズ君の絵には、家を挟んで2本の木があり、さらに家の屋根部分を挟んで、2人の人間が両腕を広げて立っています（写真下）。川はまるで以前になじんでいたものを失ってしまい、だれかの帰りを待っているかのようです。ムターッズ



ムターッズの絵

君に聞いてみると、父親がシリアで軍に囚われ、刑務所に入れられてしまっているというのです。「父さんに会いたい。シリアに戻って、武器を手にして戦争に参加したい」というのです。夜は怖い夢を見て、よくうなされると言っていました。そんな子どもたち一人ひとりの心情を、注意深く見守りながらワークショップを進めていきます。

ワークショップではミネラルウォーターと小さなお菓子を配りました。皆、奪うようにして持っていくのです。早くもらわないと、だれかに取られてしまうのじゃないかという気持ちが常にあるのです。「ありがとう」と言った子はたった1人でした。やっぱり、ありがとうと言える子どもに成長していってほしい。なぜありがとうと言う必要があるのか、ありがとうの意味などについて、子どもたちと分かち合いました。ワークショップの回数を重ね「ありがとう」が言える子どもが増えるようになるにつれ、彼らの行動が劇的に変わっていきました。初日は、ジムの外にお菓子の食べかすがいっぱい撒き散らされていました。ところが、ワークショップの半ばにはごみを自主的に拾って片づける子どもたちが出てきたのです。小さなことかもしれませんが、自分をしっかりと受け止めメンバーの1人として受け入れてくれる場所があることが、彼らの心に安心感を与え、他人や環境に対しても思いやりのある行動を取れるようになっていったのだと思います。（女の子向けのワークショップについては、誌面の都合上別の機会にゆずります。）

母の日の発表会

ヨルダンでは、3月21日が「母の日」です。そこで、子どもたちの両親や兄弟を呼んで、母の日にちなんだ発表会を行うことにしました。演目はサッカー大会とショートドラマの発表。最後には、お母さんへ感謝を込めて、カードとバラの花をそれぞれ手渡しすることにしました。地元スタッフのファワードさんの予想来場者は「10人程度」でした。いくら声がけをしても「難民は日々の暮らしに必死で、子どものイベントなど開催しても誰もこない」というのです。そこで、発表会の内容や趣旨を記したレターを作成し、お母さん向けにバラの花のイラストで飾ってみました。

お母さんのワークショップ

21日は快晴。続々とお母さんたちが集まってきます。お父さんも兄弟もやってきます。来場数はなんと150人以上。保護者の方が言いました。「ラムサ市内で子ども向けのイベントに、シリア人がこんなに集まったのは初めてのことだ」。

来場者の中にはシリアで拡散弾を受け車椅子になったお母さんもいました。彼女が言いました。「子どもたちを見ていて本当に思うのは、学ぶ機会が与えられること。それがあれば、子どもたちはそれぞれの持っているものを、驚くほど伸ばすことができるのです」。

別のお母さんも言いました。「このワークショップを通じて私の子どもは変わりました。とっても明るくなって、学校でいじめられることも減りました。先生にも成長したと言われたのです。お手伝いも積極的にするようになり、自信が芽生えてきたようです。」このワークショップに参加した男の子はのべ440人。一か月余りという短い期間でしたが、その間に彼らは大きく成長しました。いろんな子どもたちの顔が思い浮かびます。彼らがどう成長し、どうコミュニティで役立つ人間へと育っていくのか。5年後に、再び会ってみたいと思います。

母の日イベント（ラムサ）